

城と城下町の建設・形成過程における水辺空間との関わり合いに関する研究

- 全国7都市を事例に -

Study on Relations with Water Areas in Construction and Formation Process of Castles and Castle Towns

- Case Study of Seven Cities in Japan -

都市 都市雄*・地域 計画人**・市街地 整備*
Toshio Toshi*, Kazuto Chiiki** and Seibi Shigaichi*

Many Japanese cities called the castle city which were regional centers in the Edo era had water areas like a moat and a water way etc. These water areas have been staged in present town planning. But the many of the water areas have been disappeared by urban developments during about one century. We try to clarify the process of the vanishing the water areas and the relations between water areas and urban developments.

The progress of urbanizations is conspicuous in recent years in Japan. Accompany people and industry assembled in the city, the lack of urban facilities and the residential quarter have been came to ahead. As the result, the water areas in the city are filled in, and the site for them are built up. Then we try to clarify the reason a decrease of the water areas and the process of the vanishing of them.

Keywords: castles and castle towns, water areas, formation process, flood damage

城と城下町, 水辺空間, 形成過程, 水害

1. 研究の背景と目的

わが国では近世初頭、すなわち16世紀末から17世紀前半にかけての70~80年間に、全国各地で城と城下町が盛んに建設された。特にその頃建設された城下町の多くは現在も主要な都市となって活動し続けている。たとえば都道府県庁所在地となっている47都市のうち33都市は近世初頭に新設されたか、あるいは時代に適応すべく近世初頭に大改造された城下町であった。現在これらの都市に関しては、当時の大名・領主たちが計画的な意図のもとに、城と城下町を建設し、あるいは拡張整備したため、その成立の経緯や計画の考え方、さらにその後の形成期の様相は、都市計画史上極めて興味深い論題である。

また近世の城は日本の城の中で、土木・建築面から見て、規模も、構造も、人工的に最も発達した構造物であった。近世以前の城と比べてみたとき、近世の城が大きく変化した特徴は、第1に、城の地勢が要害堅固な山岳地帯から丘や平地に築かれるようになったことである。これは従来から重視された防備上の面のみを考えるだけでなく、新たに政治・経済上の面からも考えることが特に必要とされたのであった。第2に、城の構造上の変化として、石垣の利用と天守の発生が挙げられる。発達・普及した鉄砲に対応して、堀幅を広くし、塁には石を設け、建物に関しては、白亜の櫓、豪壮美しい天守といった形で象徴されるものとなった。第3に、大名の領国統一、兵農分離の進行に伴って、家臣団および商・工業者を城下に集住させるための城下町建設を居城の建設とともに積極的に行った。この時代、城と城下町の計画と建設、すなわち、城と城下町の建設・形成過程に際して、領主たちは、以下の事例を考慮したと思われる。

近世における城と城下町の立地選定に際しては、一つの

重要な要素として、河川との関わり合いが重視されていた。

たとえば、今井登志喜¹⁾は城下町に関する文献研究と地理の実際的比較研究から、近世城下町の主要な地理的条件を、1.ほぼ平野の中核地点であること。2.河流を控えていること(水上交通の便を提供するほか、一方少なくとも軍事的に城の防備をなす点において重要である)。3.出来れば、舟運の便があること。4.軍事的要害の地点であること。と記述している。城下町における近世的プランの説明の中で、「戦国期山城から平山城・平城へという城地および城下の立地移動の際、山岳地形に変わる防衛手段として援用されたのが水系であり、自然水系の利用とともに総郭その他人工の堀の開削が、プランの中で広汎に登場する。これは一方では水害に接近することであったし、低地の都市建設には排水溝を掘り、併せてその土砂で土盛りをする要素もあった。治水・利水、これが近世城下町建設・形成のポイントであった。城と城下が平地に降り、水系に近づいたのは、水陸交通の要衝に、軍事的・政治的のみならず経済的地域中心を設定するためであった。主要街道および海運・内陸水運の港津の城下町プランへの繰り込みが志向されていたことも、おおかたの近世城下の共通項といえよう。」と解説している。

藤本利治²⁾は約200の近世都市の局地地形的位置について検討した結果、そのうち「城下町については、段丘上に位置するものが多く、特に東北日本ではほとんどがこの事例であり、他方西南日本ではデルタや氾濫原に立地したものが多し」ことを示すとともに、河川との関係がことに深いことを挙げている。

矢守一彦¹⁾は城下町における近世的プランの説明の中で、「戦国期山城から平山城・平城へという城地および城下の立地移動の際、山岳地形に代わる防衛手段として援用され

* 正会員 社団法人日本都市計画学会 (The City Planning Institute of Japan)

** 学生会員 都市計画大学大学院都市計画学研究科 (University of City Planning)

が国では近世初頭、すなわち16世紀末から17世紀前半にかけての70～80年間に、全国各地で城と城下町が盛んに建設された。特にそのころ建設された城下町の多くは現在も主要な都市となって活動し続けている。これらの都市に関しては、当時の領主たちが計画的な意図のもとに、城と城下町を建設し、あるいは拡張整備したため、その成立の経緯や計画の考え方、さらにその後の形成期の様相は、興味深い論題である。近世の城は日本の城の中で、土木・建築面から見て、規模も、構造も、人工的に最も発達した構造物であった。

本研究には、現在すでに発行されている城郭史・都市史・河川史等を参考にして、各城の立地選定に対する歴史的背景と地理的条件を把握し、水害状況が文献に残っている箇所は参照し、河道の付け替え等を行った城に対しては、水害対策を当時の土木技術を駆使して、いかに治水・利水を行ってきたかを追究した。また、地形図等を、当時の絵図面を時代ごとに比較してみることによって、水辺空間・特に河道変遷を行った新・旧流路を明確にした。

一方、城と城下町の建設から形成にあたって、河川の水害に悩み、その対策に苦勞し、土木技術によって対応してきた様子を、本研究では城と城下町における水辺空間との関わり合い事例を通じて、城と城下町の建設から形成過程において、主として水害対策にいかに苦勞し、土木技術を駆使することによって、いかに対処してきたかを明らかにし、全国に散在する城と城下町をケーススタディとして取り上げ、時代の経過をふまえて相対的に検証した。

今回ケーススタディーとして検討したのは、前橋・松本・諏訪高島・清洲・桑名・福知山・姫路・岡山・福山・広島・松山・高知・熊本の城と城下町の13ヶ所と、盛岡・花巻・松代・上田の城と城下町の4ヶ所、計17ヶ所と全国に多数存在する城からみるとわずかで、主として大河川との関わり合いに絞って、中小河川についてはあまり取り扱わなかった。これだけからまとめた結論を出すのは難しいが、河川・湖沼といった水辺空間に対して、水害に悩まされたため、建設当初の防備を重視した考え方が、積極的に土木工事を起こして、城と城下町の発展基盤を造り、時代の経過と共に経済・安全を重視する考え方へと変化してきた様相が検証できた。

最近では都市の再開発において、河川を親水空間として取り扱おうとする傾向がみられ、今後の計画にあたって、河川が都市立地上の重要な要素としながらも、その対策に苦勞してきた事実や、現在ではほとんどその役割を失ってしまった水運を歴史的に検討し、治水・利水・交通・環境の問題解決の手がかりとしていきたい。

【補注】

(1) 矢守一彦は城下町における近世的プランの説明の中で、「戦国期山城から平山城・平城へという城地および城下の立地移動の際、山岳地形に代わる防御手段として援用されたのが水系であり、自然水系の利用とともに総郭その他の人工の濠の開削が、プランの中で広汎に登場する。これは一方では水害に接近することであったし、低地の都市建設には排水溝を掘り、併せてその土砂で土盛

りをする要もあった、治水・利水、これが近世城下町設営のポイントであった。城と城下が平地にあり、水系に近づいたのは、水陸交通の要衝に、軍事的・政治的のみならず経済的地域中心を設定するためであった。主要街道および海運・内陸水運の港津の城下町プランへの繰り込みが志向されていることも、大方の近世城下の共通項といえよう。」と解説している。

(2) 堀幅を決定する要因として、当時戦争時に使用されていた兵器の射程距離が考えられていた。中世において射程距離が一番長いものは弓矢であったが、中世後半に鉄砲が伝来され、戦争の戦術が変わったのと同様に、築城時の堀幅にも大きく影響を及ぼし、鉄砲の射程距離が、100～200mであり、その有効射程距離が40～60mであったので、それに合わせて築城した。

(3) 『兵法雄鑑』において、城の性を知っておくことは、重要なことと有り、「城大手の虎口、南に向時は、水性なり。北に向を、火性の城とす。余はみな是にてしるべし。しかるに其繩張に、あまたの習あり。たとえば、その地形堅固なりとも、其繩張り、宜しからざるときは、ほるまじきところに堀をほり、有まじきところに柵を付、とくすくなくそん多し。殊更合戦の刻は、敵にたすけのしよりおおくして、その勝利あやうし。このところを、将よく工夫して、その繩張りよく、けんごに取しきたまふべきことなり。口伝。」

(4) 『兵法士鑑』の「城取」には、「私云、道を行んと思ものは、能方円の道理にかなひ、神心の曲尺をはづさず、当然の理にまかせて事に随て無為なるべし。是本分の道なり。然に土たるもの如何なるをか当然の用と思可とならば、能賊をしりぞけ、三民を守護し、国を安泰になすべきこと、是家職なれば、当然の用なり。能国家を安全に守らんらば、賊は外より来不、先内を能治るを以てはじめとす。内を能治の本は城取なり。」とある。

【参考文献】

- 1) 都市都市彦 (1991年), 「近世城下町における水辺空間の維持管理に関する研究 -松本・上田におけるケーススタディ-」, 都市計画論文集 No.99, pp.255-261
- 2) (社)日本都市計画学会, 日本都市計画学会21世紀ビジョン-新時代における創造と展開, <http://www.soc.nii.ac.jp/cpij/vision/>, 2003年5月